

## 山科本願寺の内堀

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 見つかった3時期の堀（南東から）

はじめに 山科盆地の中央やや西寄り、四ノ宮川と山科川の合流点の西側一帯、このあたりは室町時代には山城国宇治郡山科郷内野村といわれた地域です。

この内野村の地に、山科本願寺は、応仁・文明の乱終結直後の文明10年(1478)、本願寺八世蓮如上人によって造営が始められました。その寺域は、御影堂・阿弥陀堂・寢殿などの主要建物のある「御本寺」、有力末寺の坊舎のある「内寺内」、そして門徒の居住区などがある「外寺内」の三つの郭から構成されていました。寺域外周などに

は、深い濠や土を高く積み上げて築いた土塁をめぐらす防衛施設を備えており、その規模は、南北1km・東西0.8kmにおよぶと推定されています。

山科本願寺は、一向宗門徒による寺内町として大いに繁栄しましたが、その隆盛も長くは続くことがなく、造営約50年後の天文元年(1532)8月、管領細川晴元率いる法華宗徒・近江守護職の六角定頼らの連合軍によって攻撃され、焼け落ちました。

しかし、現在でも国道1号線の北側には土塁や濠の一部が残り、



写真2 堀9・10の断面（北から）

2002年に「山科本願寺南殿跡 附山科本願寺土塁跡」として国の史跡に指定されています。

ここで取り上げるのは2005年の山科本願寺跡第10次調査ですが、

その後も引き続き調査が行なわれており、2012年9月現在では18次を数え、御本寺の中心部に近い場所で調査が進められています。

**堀を発見** 狭い調査区内ですが、3時期の堀を検出しました（写真1）。それぞれの堀から出土した遺物からは時期差はほとんど認められませんが、埋められた状態から堀が成立した先後関係がわかりました。

第1期は、平坦な整地層を掘り込んで、南北方向の堀10（幅2.4m・深さ2.1m・延長22m、逆台形の断面形）が掘られます。次いで第2期には、東西方向の堀8（幅3.0m・深さ2.1m・延長22m、逆台形の断面形）が堀10に直交して掘られます。のちに、この堀8は埋められ、堀10の規模を小さく造り替えて、堀9（幅約1.8m・深さ約1.2m・延長22m、V字形の断面形）を造り直しています。その後、第3期には、堀9も埋められ、北西から東方向に延びる堀7（幅2.4m・深さ1.9m・延長14m、逆台形の断面形）が掘削されます。最終的には、堀7も埋め戻され、付近は平坦地となり、東西方向の堀が設置されます。

これらの堀は、埋土の状態から空堀とみられ、また、埋土の土質は均一であるため、人為的に短期間で埋め戻されたと考えられます。埋土から出土する遺物は、ほぼ同時期のもので、短い期間の中で造り替えがあったと考えられます。また、埋土には焼土が含まれていないことから、焼き討ち以前に埋め戻されたとみられます。

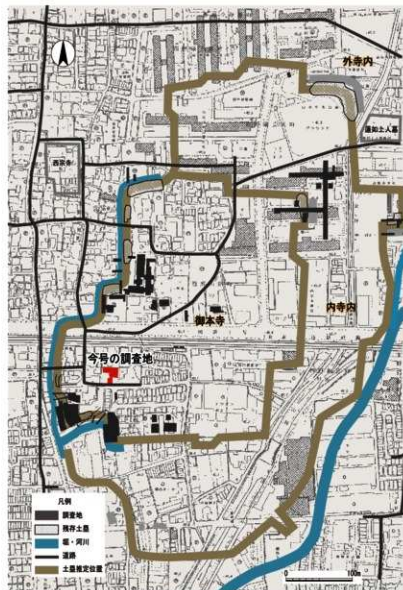


図1 山科本願寺の土塁推定位置と調査地

検出した堀は、すべて幅に対して底部が深く掘られており、その断面形は逆台形やV字形をしています。これらは、箱堀や栗研堀と呼ばれる最小の労力で最大の効果をもたらすことができる防衛的な性格が非常に強い堀です。

**まとめ** これまでの調査では、堀や土塁そして暗渠排水路の構造を確認できたことにより、山科本願寺が計画的に造営されたことが明らかになっています。しかし、広い面積の御本寺内では、御影堂や阿弥陀堂などの建つ中心部分の防衛をさらに強化するための内堀

が、必要に応じて適所に掘られたとみられます。

古絵図を基にした推定図（図1）には御本寺を中心として二重三重に土塁と堀を巡らしている様子が読みとれますが、内部にはさらにいくつもの内堀が巡らされていたことが調査によってわかりました。

このように短期間に幾度も造り替えがあった山科本願寺の内堀の存在は、外部の戦国領主や他宗派との関係を如実に物語っており、戦国時代の切迫した緊張関係がひしひしと伝わってきます。

（小繪山一良）